

## 旅をし続ける北中に

「この世の中の全てのものは、一つとところに、また同じ状態にとどまることはない」というのが、江戸時代の俳人松尾芭蕉の考え方で、それが自分の家を人に譲り、同じ場所には戻ってこないことを覚悟してまで旅に出かけたこと。人生五十年と言われた当時、晩年になっても旅に出たくて出たくてしかたがないという気もちが抑えられなかったこと。どちらも、彼の思いが並外れた熱いものであるということを表しています。

今朝私は、後期生徒会執行部に任命証を渡しました。その後、後期生徒会長のI君が、後期の専門委員長たちに任命証を渡しました。いよいよ本日より後期がスタートします。一年を前期後期に分けるのは決められたことではありませんが、前期から後期へとかじ取り役のリーダーが替わり、北中がどのように変わっていくかが楽しみです。芭蕉流に言えば、北中そのものが旅をしているということになるでしょう。



執行部について言えば、後期は地域とどのように結びつくのかが興味深いところです。前期は地域に鉢花を贈りました。そして、更にその数を増やしたりメッセージを付けたりして、より多くの生徒がプロジェクトに参加できるように取り組みました。その結果、地域の笑顔を増やすという大きな成果を収めました。

後期は、これがどのように引き継がれて、パワーアップした取り組みとなっていくのでしょうか。ただ、これまでと同じ方法では無理があるかもしれません。これからだんだん寒くなっていくことを考えると、これまでと同じように「鉢花を贈る」ということが難しくなってくるからです。

前期と後期が共通して取り組むべきは「地域貢献」ですが、気候や感染状況を考え、知恵を絞って新たな方法を生み出す必要があると思います。そんな期待を、私は後期の執行部に寄せています。

また、専門委員長たちには、これまでの委員会のイメージチェンジを図ってほしいと思っています。もちろん、好き勝手やってほしいということではありません。これまでの取り組みを基本としながら、新しいことに挑戦したり違う方向から迫ったりして、前期と後期の違いを明確にして活動してほしいと願っています。

日本のリーダーが代わっても、大きな期待は生まれませんね。初めは期待して支持率が多少高くても、やがてはそれも徐々に低下していくのが日本の政治です。そして「だれがリーダーになっても」などというあきらめの声が、あちらこちらから聞こえてきます。

北中では、絶対そうならないようにしていかねければなりません。I会長率いる新体制の下、旅をし続ける北中にしましょう！